



ウメ

135 編は **ハレルヤ** という言葉で始まり、**ハレルヤ** という言葉で終わっています。**ハレルヤ** という言葉は旧約聖書では詩編でのみ用いられ(23 回)、「神の救いを喜び、神を賛美する」という意味で、賛歌のための感嘆詞です。

聖書の民は「先祖の言い伝え」を非常に大切に継承する民です。この詩編もまた、歴史に言及し、神の選びと祝福を語り伝えようとするものです。

1連で、**ハレルヤ。賛美せよ、主の御名を／賛美せよ、主の僕らよ。(1)** と呼びかけ、主の御名を賛美します。**主の僕ら** とは **主の家に／わたしたちの神の家の庭に居並ぶ人々(2)** です。

主の御名 は、モーセに伝えられたように、古代ヘブライ語で יהוה (YHWH) と表記され、その意味は《わたしはある》であり、読み方は「エフェ」であると木田献一先生は解説されました。ただ、みだりにその名を唱えてはならないとの戒めがあり、「主 (アドナイ)」と言い換えたとのこと。

2連では、**主はヤコブを御自分のために選び／イスラエルを御自分の宝とされた。(4)** と、民は神に選ばれ、しかも尊い存在とされたという自負が誇らかに歌われています。民を選ばれた神は、**どの神にもまさって大いなる方(5)** と賛美し、神の力を、**天において、地において／海とすべての深淵において／主は何事をも御旨のままに行われる。(6)** と全能の神、普遍の支配者と捉え、賛美しています。

3連では、**エジプト中に、しるしと奇跡を送られた(9)** と、出エジプトの苦難の道を通して与えられた様々な恵みは、主の救いの証拠であるとしています。奇跡こそ、神のしるしと受け止めています。

4連では、**彼らの領地を嗣業として…御自分の民イスラエルに与えられた。(12)** と、カナン侵入の当初、民がその地を通過するのを許さなかった王たちとの戦いで勝利を収めたことと、それによって得た嗣業の土地を覚えて、賛美しています。

5連では、**主の御名** が永遠に、代々に記念されていくことと、その **御名** によって、民は裁かれ、また力を与えられると賛美します。

6連では他民族の神々は **偶像** であり、**金や銀にすぎず／人間の手が造ったもの。／口があっても話せず／目があっても見えない。／耳があっても聞こえず／鼻と口には息が通わない。(15)** と言います。そして、**偶像を造り、それに依り頼む者は／皆、偶像と同じようになる。(18)** と、偶像を拜む者は生きていないし、生きられないと断じます。

最後に再び、**シオンから、主をたたえよ／エルサレムにいます主を。ハレルヤ。(21)** と、主を賛美します。**主の僕ら** は、さらに具体的に **アロンの家よ、レビの家よ(19)** とあるように、祭司たち、神殿で働く人々です。それゆえに、**シオンから** や、**エルサレムにいます主** の言葉の中に感じられるように、祭司たちの神殿中心の思いが強く伝わってくる詩編です。

『讚美歌 21』には関連讚美歌はありません。ジュネーブ詩編歌はリコーダーとオルガンによる爽やかな合奏です。 <https://www.youtube.com/watch?v=Y9ind7rr0Sw&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=135>